

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 14 日現在

機関番号：24403

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22890164

研究課題名（和文）認知症対応型通所介護施設における
ケア実践力向上アクションプランの作成研究課題名（英文）An Action Plan to Improve practice skills of staff working in
an Outpatient Long-Term Care for a Dementia Patient

研究代表者

江口 恭子 (EGUCHI KYOKO)

大阪府立大学・看護学部・助教

研究者番号：10582299

研究成果の概要（和文）：認知症対応型通所介護施設において、アクションリサーチの手法を用いて行われているケアとその課題を明らかにした。現場では特に苛立ち・暴言のある利用者のケアが課題だと感じていた。そこで特定の利用者には焦点を絞った参加観察と認知症ケアへの思いを聞く個別インタビューを行った結果、これまでの経験を生かして多様なケアで対応している反面、それでもうまくいかないことへのジレンマを感じていた。これらの結果を職員にフィードバックしたところ、法人内で発表するという自発的な取り組みへとつながった。

研究成果の概要（英文）：In this study, I clarified care and problems in an outpatient long-term care for a dementia patient by using action research. It was thought that a care of the user who had irritation and abusive language was a problem especially on the site. Then, I performed the participant observation which focused on the specific user and individual interviews to hear thought to dementia care. The result said that they provided various cares which based on their experiences, but felt the dilemma which they didn't go well. After feeding back these results to the staff, it let to the voluntary action that they announced in a corporation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	860,000	258,000	1,118,000
2011年度	680,000	204,000	884,000
総計	1,540,000	462,000	2,002,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：高齢者看護・認知症ケア・アクションリサーチ・通所介護

1. 研究開始当初の背景

わが国は世界に類を見ないスピードで高齢化が進行し、超高齢社会を迎えた。高齢者の増加と共に高齢者に多い疾患である認知症の問題も深刻化している。厚生労働省は2015年には何らかの介護が必要な認知症高齢者の数は250万人に達するとしている¹⁾。しかしこれは7年前の推測値であり、現在はさらに深刻化していると考えられる。高齢者虐待、老老介護、認認介護などの問題が取りざたされる中、自宅で暮らす認知症高齢者と

その家族にとって、通所介護施設は家族の休息や本人への認知的、身体的刺激、社会性の維持などに大きな役割を果たしている。特に認知症デイは一般型よりも手厚い人員配置のもと、より専門的なケアを行っている。認知症はその人、その時、その場所、状況で症状が異なり、BPSD(Behavioral Psychiatric Symptoms of Dementia：認知症による行動・心理症状)への対応も毎回同じ方法が通用するとは限らない。そのような中、ケアスタッフは認知症高齢者の状態に合わせて、経験

的にケアの方法、手段を選択し実践を積み重ねている。平成 19 年の厚生労働省による介護サービス施設・事業所調査では、認知症デイは全国に 2484 施設となっており²⁾、認知症高齢者の増加に伴い現在ではさらに増加していることが予想され、ケア実践力の向上とその方法の開発が望まれる。

現在、ケア事例の報告書が出版されており³⁾、このような書籍を参考にすることはケア向上の一助になると考えられる。しかし、多忙なスタッフにとってはこれらに自らアクセスし、学習することは難しく、また、個人々の努力だけで施設全体のケア向上を図るには限界がある。そこで、本研究では実践しながら理論形成を目指すアクションリサーチの手法を用いて、ケア実践力向上のためのアクションプランを作成する。アクションリサーチとは 1940 年代に米国の社会心理学者 Kurt Lewin の活動から始まった、実践とその分析を結びつけて 1 つのものにし、絶えず発展し続けるという連続性の中で専門性の高い経験を探求していく手段である⁴⁾。この手法の利点は、より現場に沿った方法でケア実践力の向上を図ることができ、そこで作成されたアクションプランは 1 つの施設にとどまることなく、他の施設での実践や教育にも利用できる可能性があるということである⁵⁾。この点から、アクションリサーチは単なる業務改善にとどまらず、理論化にもつながる研究であり、本研究も将来的には今回の対象施設に限らず多くの認知症デイ施設のケア向上を図ることを目的としている。

<文献>

- 1) 厚生労働省：高齢者介護研究会報告書 2015 年の高齢者介護、[http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/3.html#2\(2003\)](http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/3.html#2(2003))
- 2) 厚生労働省 統計情報部社会統計課：介護サービス施設・事業所調査，(2007)
- 3) 日本認知症ケア学会：認知症ケア事例ジャーナル，ワールドプランニング(2008)
- 4) ホロウェイ，ウィーラー著，野口美和子監訳：ナースのための質的研究入門 第二版，医学書院(2006)
- 5) Alison Morton-Cooper 著，岡本玲子，関戸好子，鳩野洋子訳：ヘルスケアに活かすアクションリサーチ，医学書院(2005)

2. 研究の目的

本研究では研究協力施設で参加観察、個別インタビューを主に用いて協力施設の実践者と共に以下の点を明らかにすることを目的とした。

- (1)実践されているケア内容とその意義
- (2)実践者の認知症デイにおけるケアへの思い
- (3)実践されているケアの課題

(4)思いを実現するためのアクションプラン

3. 研究の方法

認知症対応型通所介護施設において、そこに勤務する介護職・看護職と共に考えながら以下の五段階を経て、ケア実践力向上のアクションプランを作成する。

【第一段階】実践しているケアの記述と意味づけ

研究協力施設において参加観察を行う。現場で行われているケアを研究者がメモし、実践者に振り返りメモを記入してもらう。研究者はそれをもとに短い面接を行い、内容を補完して場面を再構成し、ケアの意味を実践者と確認する。

【第二段階】ケアへの思いの明確化

個別面接を行い、日ごろのケアについてのケア実践者の思いを把握する。研究者も現場にケア提供者として定期的に関わり、得られたデータをケア実践者にフィードバックしながら、ケアへの思いを明確化する。

【第三段階】実践しているケアの課題の明確化

第二段階でフィードバックした結果をもとに、職員とともに話し合い、ケアの課題を明確化する。

【第四段階】思いを実現するためのアクションプラン作成

【第五段階】アクションプランの実行と評価

4. 研究成果

研究期間を通しての取り組みでは、第三段階の実践しているケアの明確化までを実施した。現場の意見を聞いていく中で、特に苛立ち・暴言という BPSD を呈している利用者のケアの課題について明らかにしたいとのことであったため、そこに焦点を絞ってデータを収集した。

(1)個別インタビュー

10名の介護職と1名の看護職に対して、苛立ち・暴言を呈する利用者のケアに対する思いを聞いた。インタビューは20分から60分で、1人につき一回行った。データは承諾を得た上で録音し、逐語録を作成した。逐語録を熟読して意味内容にそって分類した結果、以下の表となった。

表1 ケアに臨む際に抱く感情

カテゴリー	生データ
対象者の心の奥を見たい	「基本は、相手の、何やら、心の奥を見たいみたいな気持ちはありますけどね」 「その人の行動してる、見えない部分っていうのかな、見えてる部分よりもっと奥の部分、すごくあるんやろうなって」
来て良かったという感情だけでも残ってほしい	「あっ、ここに来て良かったなって、少しでも思える瞬間が、あったらいいなとか思いながら」
一瞬でも安らぐ時間を作りたい	「認知症の人ってすぐ忘れはるけど、楽しかったっていう思い、ホッとできたっていう思いが一つでもあれば、OKかなって」

表2 ケアの結果に抱く感情

カテゴリー	生データ
今までのケアが通用しない戸惑い	「認知症介護の基本というのが (中略) 通用しないことが多いっていうのはすごく感じます」
対象者の怒りと悲しみを癒せないやせなさ	「あんだけ怒ったら、しんどいもん、だって。怒るってしんどいじゃないですか。(中略) 人に対して怒ってる自分って、とてもしんどいでしょう。あれが何とかならないかなと思う」
暴言が心に突き刺さる辛さ	「すごい、すごい心に突き刺さるんですよ」 「ばしばし言われたことが、脳裏に、なんかちよつと、眠りが浅いときに出てくるんですよ」
理想とするケアができないもどかしさ	「自分の理想がどんどん遠のいていくみたいなね」
その場しのぎのケアしかできない苛立ち	「何かこれでいいんだろうかとか思いながらも、その場しのぎでやってますよね」

表3 ケアを試行錯誤する中で抱く感情

カテゴリー	生データ
自分のケアが苛立ちを助長するのではないかと恐怖	「やることによって、より火を付けてしまう可能性があることへの恐怖心が、あるのかもしれないですね」
自分の不安が対象者に伝わる懸念	「こっちも不安やし、もう頼むし、ここに座ってて、ああ、頼む、何かこういう表情が (中略) 余計に彼女も不安になり、こっちも不安になり悪循環」
ケアの方向性が見えない不安	「すごいいいときもあれば、体調によって悪いときもあるし、持っていく先が見えないです、とても、すごい不安で」

表4 他利用者に抱く感情

カテゴリー	生データ
他の利用者へ及ぼす影響への懸念	「ほかの方がおろそかになるっていうのが、すごく苦痛」
利用者本位を貫けないジレンマ	「時間内にあれもしな、これもしなと思うと、利用者本位が、知らんまに自分本位になっていってるなっていうのはありますけど」
他の利用者の言葉に救われ癒される	「認知症の人からの、その生の声がこっちに伝わって、わたしらも、それに救われる、その言葉に救われるみたいな面はね、やっぱりありますからねえ」

表5 職員に抱く感情

カテゴリー	生データ
他の職員を悪く言うことへの罪悪感	例えば、『スタッフのあの、悪い人や』とか、悪口を言わはるのを、(中略) 同調することによって、その相手のスタッフに、なんかすごい申し訳ない気分になったりとか
職員同士で話してしんどさを分け合い楽になる	「職員の方も、精神的に参ってるところがあるので、何で助かってるかって、みんな話すことで、支え合ってるところで助かってます」

苛立ち・暴言のある認知症高齢者をケアする際に「対象者の心の奥を見たい」と前向きな気持ちで臨んでいる。しかし、暴言とい

う反応が返ってくると＜今までのケアが通用しない戸惑い＞を感じ、暴言そのものにも＜暴言が心に突き刺さる辛さ＞を受ける。暴言という反応がなかったとしても＜その場しのぎのケアしかできない苛立ち＞を抱く。ケアを試行錯誤する中で＜自分のケアが苛立ちを助長するのではないかという恐怖＞を抱くまでに至る。

また、対象者にかかりきりになることにより＜他の利用者へ及ぼす影響への懸念＞を抱くが＜他の利用者の言葉に救われ癒される＞時もあった。同僚に対しては、ケアする中で対象者に同調するために＜他の職員を悪く言うことへの罪悪感＞を感じつつ＜職員同士で話してしんどさを分け合い楽になる＞ことで、救われていた。

(2)参加観察

苛立ち・暴言を呈する利用者 A 氏の行動とそれに対するケアに焦点を絞り、12回の参加観察を行った。その結果、暴言・苛立ちの形で感情を爆発させることの多い A 氏でも、ごく稀に穏やかな表情を見ることがあり、それは A 氏の表情と言動・行動をきめ細やかに観察して臨機応変にケアを行っている職員の技術によるものであることがわかった。しかし、経験豊富な職員でもケアが届かずに苛立ち・暴言を助長することも多くあり、このことが A 氏のケアを困難にしていると考えられた。

(3)研究参加者自身による自発的な取り組み

上記(1)、(2)の結果を随時、研究参加者にフィードバックする中で、参加者よりインタビューの結果を自分たちの手でまとめ、所属法人内の研究発表会で発表したいとの声が上がった。研究者が収集したデータをもとに、暴言・苛立ちのある認知症高齢者のケアをする際の課題と対応策について研究参加者がまとめた。その結果、職員は様々な感情を持ち、悩み、ケアに対する前向きな気持ちを失うこともあるため、職員が互いのケアを認め、肯定的にとらえるための機会を持つことが必要であるという考察が得られた。

(4)今後の展望

研究参加者である職員の自発的な取り組みにより得られた、「職員が互いのケアを認め、肯定的にとらえるために機会を持つことが必要」ということから、どのようにその機会を持つかについてを共に話し合い、具体的な取り組みにつなげていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

江口恭子、長畑多代、苛立ち・暴言のある認知症高齢者をケアする認知症対応型通所介護職員の感情、日本ヒューマンケア心理学会、2011年7月23日、大阪市立大学看護学研究科

6. 研究組織

(1)研究代表者

江口 恭子 (EGUCHI KYOKO)
大阪府立大学・看護学部・助教

研究者番号：10582299

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし